

Topics 国立病院総合医学会セッション

同世代の研究発表を通して刺激的な交流を 若手医師フォーラム

国立病院機構に所属する若手医師が取り組んできた症例や研究を発表する場として2013年からスタートした「若手医師フォーラム」。今回は全国から32演題の応募があり、優秀賞に輝いた先生方にお話をうかがいました。



「オーラルセッション」最優秀賞

Fluctuations in hallucination within a day in relation to dopamine D2 receptor blockade with antipsychotics in schizophrenia.

下総精神医療センター 精神科 小泉輝樹

——発表の動機、テーマとポイントは？

私が行っている臨床研究を国立病院機構の他科の先生方にも知っていただく貴重な機会だったこと、今後、国際学会で発表するにあたり、国内で英語のプレゼンテーションができる場だったことに魅力を感じ、応募しました。

今回、発表したテーマは「統合失調症患者における幻聴の日内変動と抗精神病薬によるD2受容体との関連」についてです。

統合失調症の維持期治療において、抗精神病薬による線条体D2受容体の占有率は急性期ほど必要なものではない可能性があるという近年のエビデンスがあります。実際に幻聴が起きているタイミングと薬の濃度は必ずしも合致せず、幻聴体験は夕方によく起きるといった結果となり、維持期においてはD2受容体の継続的な高い占有率は不要であるという近年のエビデンスを支持する結果となりました。

——このテーマに決めた理由は？

抗精神病薬の多剤併用は他国と異なり、本邦における精神科治療の大きな問題点と言われている

ます。不要かつ過剰な抗精神病薬の漫然とした投薬に対する警鐘としてのエビデンスの蓄積を目的としています。

また、薬物療法という臨床的にも患者さんに大変有益な考え方と、他科と異なり、精神科の中で独自に発展した伝統的症候学へのオマージュもこめて「幻聴」という症状に着目しました。

——英語での口演の感想、全体の印象は？

日本語は母国語なので、発表中も多少言い回しを変えるなど、自分の言葉でプレゼンテーションできるかと思います。しかし、英語の場合は、事前に展開や言い回し、道筋を決めておかないと言葉に詰まった時にリカバリーが難しくなってしまいます。日本語よりも念入りに準備をして何度も練習することが必要でした。

現時点での私のベストを尽くしたと思っていますが、質疑応答ではもっと話したいことがあったのに、それを十分にお伝えできず、残念でした。

——他の発表者から学んだことは？

備しておけばよかったと思いました。

——ポスター発表で勉強になった点は？

ポスター発表自体が初めてで、伝えたい内容を、いかに見やすいポスターにするかを学びました。また、これまで論文を読むことがあっても、内容を理解するのに必死でしたが、今回英語で準備するにあたり、論文での言い回しが非常に役に立ったので、どのような表現を使っているかを見ながら読むと今後、役に立つと思いました。

The measurement of prothrombin fragment 1+2 (PF1+2) for evaluation of excessive suppression of the anticoagulant activity.

九州医療センター 脳血管・神経内科 友田昌徳

——発表の動機、テーマとポイントは？

今回の発表では、「凝固系分子マーカー〈プロトロンビンフラグメント1+2〉」を使用した抗凝固療法の検討」をテーマにしました。ワーファリン療法中にはPT-INRの値に関わらず、PF1+2が低下している（過剰なプロトロンビン抑制がかかっている）症例を17%認めました。DOACと比較し、ワーファリン療法中に頭蓋内出血が多い原因の1つと考えられるかもしれません。この仮説を発表することで、何かしら貢献できる可能性があると感じたため、この



今まで異なる分野の先生方の講演をうかがう機会があまりなかったため、貴重な機会をいただいたことに感謝します。大変高度な内容の研究をなさっている先生方が多く、洗練されたプレゼンテーションにも感銘を受けました。正直に言って、私より素晴らしいプレゼンターが多かったと感じたので、授賞できたことには大変驚きました。

——今後の参加者へのメッセージ

「若手医師」と呼ばれる期間は長いようで短いと考えています。日々の診療で忙殺されがちですが、医師の業務は臨床、研究、教育と多岐に渡ります。自分のキャリアを見つめる時、今回のような機会は貴重な場であると思います。日本と世界の医療の発展のために何ができるのかを考えるためにも良い機会ではないでしょうか。

「ポスターセッション」優秀賞

A case of urethral stricture after transurethral resection of the prostate

岡山医療センター 教育研修部 浮田明見

——発表の動機、テーマとポイントは？

2009年に受けたTURP後、尿道狭窄を来し、バルーン拡張術や内尿道切開術を施行したものの、改善を認めなかった症例に対して尿道会陰瘻をつつった1例を取り上げました。尿道狭窄の手術としてさまざまな手法が行われますが、尿道会陰瘻という治療を施行した点がポイントです。

これは初期研修中に泌尿器科をローテートした際に経験した症例です。約10年にわたる経過があり、当院で尿道会陰瘻を作った初の症例だったため、指導医の先生に薦めていただき、発表することになりました。国内の症例を探してもほとんど行われておらず、排尿困難の根治術の一選択肢になりうることを伝えられればと思いました。

——どんな点に苦労しましたか？

発表内容の勉強に加え、専門用語の英訳や言い回しを調べる必要がありました。質疑応答も英語であったため、どんな質問がくるかを予想し、英語でも準備しておくことが大変でした。

多彩な分野の先生方が聞いてくださいましたが、「尿道会陰瘻についてもっと詳しく説明してください」と質問され、ポスターの記述をより意識して準備



テーマを選びました。

——どんな点に苦労しましたか？

英語での発表が初めての経験でしたので、準備は苦労しましたが、当院の臨床研究推進部長の矢坂正弘先生にたくさんご指導いただきました。時間配分の仕方に課題が残りましたが、このような機会を与えてくださり、とてもありがた感じています。他の発表者の方々も、他分野で積極的な研究をされていて、とても刺激になりました。

——ポスター発表で勉強になった点は？

今回の発表は、本部の石田素子先生（現：九州医療センター膠原病内科勤務）に「若手医師フォーラム」のことを教えていただき、当院の臨床研究センター長の岡田靖先生の薦めもあって応募しました。今回は残念ながらオーラルでの発表ができなかったのですが、他の先生方の発表を聞き、自分の語学力の不足を痛感できたことが一番の学びです。来年こそ、オーラルセッションで発表できるように精進していきたいと思います。